

エピソード 自分のことが個人攻撃されたと

感じている人々のために

私たちは、聖書的な強調が特徴的になされていながら、とかく無視してしまいがちな記事を検討してきた。明らかに聖書にはもっと他の強調点もある。しかし、それらは私たちが検討してきたことに対立するものではなく、むしろ追加となるものである。本書で取り上げたことを他の聖書資料を用いて補足することはできるかも知れないが、聖書の使信を歪曲せずして本書で展開した主題を抹殺することはできない。

それでは中産階級的で、善意に満ち、誠実に教会に関わっている主流教会の人々はどうすればよいのであろうか。もしもあなた方がまだ本書に耳を傾けているとすれば、打ちのめされ、傷つき、身の細る思いがしているであろう。それぞれの章の中で、違った方向からの攻撃を受けたことに対して、憤慨し、頭にきているかも知れない。「これが良い知らせだって。そうだとっても誰がほしいものか。ただ飢えてないからといって、私たちは罪意識を持たなければいけないのか。

私たちの国は正しいことは全く何もしていないのか。貧しいことや第三世界にいたることだけが価値あることなのか。聖書は私たちをこきおろしてしかないのか」と反発したくなるのである。私とてもこのような感情に陥らないとは限らないので、いくつかの反応を検討してみることしよう。

1 「良き知らせ」に対する最初の反応として、誰しもがそれを悪い知らせだと受け取るのはまともなことである。なぜならば良き知らせを受け入れる前提条件は、変わる、こと（聖書が言うところのメタノイア、「悔い改め」「回心」）だからである。私たちは変わる必要があると告げられることは、私たちの現在のあり方では不十分だと告げられることである。それゆえに変わるようにという警告は常に悪い知らせであり、私たちを不愉快にし、自己防衛的にするのである。

使徒ペテロの例は、彼が私たちと同列の仲間であることを示している。彼が初めてイエスに出会った時の反応は、「良い知らせをもたらすために現れて下さいました。とても嬉しいです」ではなく、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者です」であった。つまり彼は、「私をそのままにして下さい。あなたは私がささげたいと思っている以上のことを求めておられます」と答えているのである。

それゆえに、聖書の使信と私たちの最初の対面が不愉快なものであったとしても、私たちだけがそうなのではない。それはキリスト者であることにはつきものである。しかし不愉快に感ずべきことを、今まで私たちがそう感じていなかったとしたら、それはどういうことになるであらうか。

2 私たちが不愉快に感ずるのは、第三世界のキリスト者が私たちをこきおろそうとしていることに原因があるのではないことに気づくべきである。私たちを不愉快にしているのは彼らではなく、むしろ聖書が私たちを不愉快にしているのである。彼らは私たちに罪意識を持たせようとして新しい聖書の使信をつくり出しているのではない。彼らは、私たちが罪意識を持たないようにと何世紀にもわたってごまかし続けてきた古来の聖書の使信に注意を向けさせようとしているだけである。古代においては、王は良くない知らせを携えてきた預言者を時々殺そうとまでしたが、そのことは、問題の根源を究明する能力が王になかったこと、それにまた、危機の時代にはあまり預言者が出なかったことを示している。今日、王の間違いを繰り返してはならない。

(少し自己弁護的になるが、ここで述べておきたいことがある。なぜならば、読者の中には、私が本書を通して「あなた方は人のことを気にかけないひどい人たちだ」と言っているように受

けとめている方々がおられるかも知れないからである。それに対して私は、自分も読者の方々と同じように、聖書の使信によって非難されていると感じているのだと答えることができるのみである。そして、おそらく私がいつそのことを強く感じるのは、私は本書の主題に数年間頭を悩まし続けはしたものの、その間に特に目ざましい自己変革を遂げるといったこともなかったからである。私は金持ではないけれども、決して貧しくはない。私の現在の所得はそれだけで生活するのはなかなか難しいが、それでも世界の大半の人々と比べると王侯貴族のようである。私の家は大きくないとしても、十分な広さがある。私の食料貯蔵室はふんだんな蓄えがないとしても、空っぽであることからは程遠い。それゆえに読者の方々が自分のことが非難されていると感じているとしたら、著者である私も同じ気持ちだということをおいて頂きたい。

3 合衆国を「非難攻撃」したことに短く述べよう。私たちはソ連や中国の政策について直接的責任はない。私たちは合衆国の政策について直接的責任があるのである。私たちが最初になすべき、そして最も強い批判は、自分たち自身に向けなければならない。この点で私たちが正直であれば、私たちには他のどの国をも批判する権利があるし、批判してゆかねばならない。しかし、そこには順序というものがある。「ソ連」批判はしばしば、私たち自身の欠点を覆い隠

す煙幕を張る方法となっているからである。

さらにそれ以上に、ソ連批判の多くは正当化されている。第三世界のキリスト者は私たちのことをこのように受けとめているし（このことだけでも彼らに耳を傾けて注意深く聞く理由になる）、実際ほとんどの場合、私たちはそう言われても仕方のない行動をとっている。ある独裁者に関して、「アメリカに支援された」という言い方がなされる場合には、不幸にもそれは単に事実を述べているに過ぎないのである。もし私たちがこういった事実を道徳的に嫌悪するのならば、それを生み出している状況を変革しなければならない。ソ連に対する批判が正当でないと思うなら、私たちは善意の声明文に訴えるだけでなく、釈明を求めて政府を突き動かすことができるようになければならない。

国家は、いかなる時代のいかなる文化においても、すべての神々の中で最も広くゆきわたった神である。本当の愛国心とは自分たちの国家を崇拜することではなく、むしろ正義の神を礼拝する光のもとで、自分たちの国家のあり方を正義に従うようにすることである。かつてアルペール・カミュは、「私は国を愛し、しかも正義を愛するようでありたい」と書いている。これは常に価値ある、そして必要とされる願望であらう。

「個人攻撃」という点を問題にするとしたら、制度的な悪についてすでに述べたいくつかのことを思い出してみる必要がある。私たちが生活を営んでいる社会的、政治的、経済的制度から、一部の人々（私たちのような少数の人々）だけがふんだんに利益を獲得し、他方では、その他の人々（私たちとは違う大多数の人々）が押しつぶされたり殺されたりしていることは本当である。しかし、これは、多国籍企業の重役たちが会議室に座って、「もっと利益が上がって子供たちが飢えに苦しむようになる方法を考え出そう」と唱えているということではない。もし彼らが企業規則に従っているのであれば、彼らは、「もっと利益を上げる方法を考え出そう」と言っているに過ぎない。そして悲劇的なことは、彼らがより大きな利益を獲得する方法が、子供たちが飢えに苦しんだり、独裁者が支援を受けることになるといった、意図しない結果をもたらしているのかも知れないことである。独裁者は「社会的安定を維持」できると言うが、それは、労働者が賃上げを求めて組織化するのを妨害するのに必要な武力をいくらかでも行使するという遠回しな言い方ではないし、賃上げは利益の減少を意味しているのである。問題点は、悪意を抱いた少数の権力者が好き勝手なことをしているというよりも、善意を持った少数の権力者が、自分たちの意図とは全く正反対に、悪い結果を生み出しているということかも知れない。

このことは、肉体的に圧迫されたり飢えたりしている人々だけが「犠牲者」なのではなく、自

分が欲していないにもかかわらず、体制に強制されて他人を殺すことに加担している、感受性ある人々もまた「犠牲者」であることを意味している。そのような人々にとって、自分たちは操られており、それゆえに非人間化されているのだということを認識し始めることが重要である。彼らは、自分たちが望んでいるような企業決定を下すことができない立場に置かれており、企業の中で生き延びなければ、自分では個人的に賛成していない企業方針でも実行するように強制されているのである。

もし本書の読者にそのような方々がおいでになるとしたら、私が言っていることを個人に対する新たな攻撃としてではなく、偽りの神々の厄介になりながら余生を送ることから自己解放される可能性を少しなりとも示唆するものとして聞いて下さることを希望する。そうすることによって、聖書に対して新鮮な気持ちで接することができるようになるであろうし、非難のとげが希望を生み出す陣痛となることに気づかれるであらう。

5 確かに、大きな希望は、私たちを虜にしているいくつかの偽りの神々——聖書はそれらを「偶像」と呼んでいる——から解放され始めることができる、ということである。私たちはそれらの名前を知っている。それらは、変革に対する恐怖、体制への順応、子供時代から私たちに組み

込まれる成功願望の重荷、「非国民」という汚名、権力を失う脅威などのことである。これらすべての神々は、私たちが次のような問いを発するようにすることをやめさせようとする。「私たちの忠誠心が各地で私たちの姉妹たちや兄弟たちを肉体的に殺し、そして同時に私たちをも殺しているのだとしたら、何かが間違っているのではないか」という問いである。

私たちの忠誠心もたらしている結果に関する問いにも真つ向うから直面することができないならば、私たちは、聖書が語っている難儀なしかし必要な道程、すなわち「立場を変える」という歩みを開始することができるようになるであろう。私たちは自分たちの古くからの遺産を新しく読み返し、そして新しく自分のものとすることができるようになるであろう。その遺産は私たちが学んできている書物の中に保存され、私たちの歴史と伝統の中に秘められている。その中身は常にいかなる入れ物よりも力強く、何の脅威も感じさせないような陳腐な言葉に矮小化しようとする試みよりも力強いのである。

私たちがこの問いに真つ向うから直面する時には、私たちはイエスの宣教活動において記録されている最初の言葉を、かつてなかったような仕方——あたかも初めて耳にするかのように——聞く用意ができているであろう。「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」(マルコ・一五)。

本書はもともとラテン・アメリカを始めとする第三世界の解放神学を、第一世界の人々のために解説する意図のもとに執筆されたものです。すでにブラウンには、解放神学の衝撃を第一世界でどのように理解するかについて、組織神学の立場から書いた有益な解説書があります (*Theology in a New Key: Responding to Liberation Themes*, Westminster Press, 1978)。しかし今回の著作は、そうした組織神学によるのではなく、聖書の解釈方法を、具体的な聖書箇所に基づいて行なっている点が特徴的です。聖書は第三世界の諸神学にとって、民衆の体験とともに重要な神学の資料です。第三世界の神学者たちは、聖書にある解放的証言を、政治、経済、文化的な抑圧の状況の中で読み取ろうとしています。聖書に示された神の解放のわざを取り上げて、現代の貧困や抑圧や差別に挑戦し、キリスト者の使命を負う者や犠牲者の側に立つことに見出そうとしています。聖書は、具体的に被抑圧者に力を与えて、彼らの勇気を奮い立たせ、神の解放のわざがどのようになされるかを知る上で、不可欠な書になっています。

ブラウンが語りかける北アメリカの読者にしても、日本の私たちにしても、初めのうちは、第三世界の状況があまりに遠いものに見えるでしょう。第三世界の貧困や人権の抑圧は、私たちの

日常の意識の中にはあまりはいってきません。けれども私たちの生活を、序論に出てくる「空軍の退役少佐」のように、少しでも批判的に考察すれば、それが第三世界の人々の生活と密接な関係があることがわかるでしょう。また第一世界において、第三世界の人々のように抑圧されている少数者の現実にも気がつくでしょう。

ブラウンは「われわれが何を見るかは、われわれが何処に立っているかによって決まる」と指摘します。私たちは自分の立場を唯一の規範のようにしがちです。しかし異なった視点を持つ人々から、私たちは自分の姿、および世界の緊急な課題を社会的にも信仰的にも教えられる必要があります。いやむしろ、そうした人々の目から、本当の私たちの存在の姿が浮かび上がってくるのです。「第三世界の目で聖書を読む」ということは、私たちの発見の最初のわざでもあります。

本書を通して読者は、解放神学が主張する「被抑圧者の視点」から聖書をどのように解釈できるか、そして私たちがどのような挑戦を受けているかの具体的ヒントを読み取ることができるでしょう。第三世界神学の聖書解釈で重要とされる主要なパラダイム——出エジプト物語、預言者の批判的伝統、イエスの解放のわざなど——は、本書によってそれぞれ、助言と考察課題を伴って論じられています。これによって読者は、第三世界の聖書解釈の中心の問題を知ることができます。

ます。そして聖書が元来「意外な知らせ」であり、私たちの平素の考え方とは異なった世界を投げかけていることが理解できるでしょう。

かつてボンヘッファーは『獄中書簡』の中で、「世界の出来事を、歴史の下から見る」こと、「抑圧された者、無力な者、苦しむ者、アウトカーストとされた者」の目で、キリスト教信仰も、文化も社会も再解釈していくことが、これからの私たちに絶対に必要だと示唆しました。第三世界の神学者がボンヘッファーを取り上げるのは、第一世界の神学のように、「神の死」「世俗化」「非宗教的解釈」などの視点ではありません。むしろ差別された者、抑圧された者の見方が採用されなければならないこと、第一世界の者もボンヘッファーのように視点の転換ができることを示したいからです。これまでの歴史の見方や聖書の読み方を批判的に変えて、新しい仕方で物事を見ることができるといふ事実を、読者も心に留めてほしいものです。「下からの見方」は、本書で言えば「第三世界の目で」ということになります。このようなラディカルな視点の転換こそ、キリスト教という「目覚め」「回心」という象徴語が示すものでもあるでしょう。

さて著者のロバート・ブラウンはアメリカ合衆国ではよく知られた神学者の一人です。彼は一九五三年から一九六二年までニューヨークのユニオン神学校で組織神学を教え、その後スタンフォード大学に転じて宗教学を講じ、一九七六年から再びユニオンに戻ってエキュメニカル神学

を講じました。しかし一九七九年には、カリフォルニアに戻って太平洋神学校で倫理学と神学の教鞭をとり、現在はそれを辞して講演会や著作活動に専念していると聞きます。エキキュメニカルな神学会議などの講演を通して、日本でも彼を知る人は多いでしょう。

私ごとですが、私たち訳者はブラウンがニューヨークのユニオン神学校で教鞭をとっていた七〇年代後半に、それぞれ親しい交わりを持ちました。栗林はある機縁で、彼の家に二年余り居候し続けましたし、山下はプリンストン神学校留学中、たびたびブラウン家に泊り、プリンストンの「正統主義」と一家の「異端的自由」の間を往復しました。実際、彼の家には、彼の人柄を反映して、常に学生や訪問者が溢れ、一種の解放的「基礎共同体」を創出していたことを懐かしく思い出します。本書は、常に一般の人にもわかりやすく神学をしてもらおうとするブラウンの特徴を示す、格好の入門書でしょう。学生諸君、信徒や教職者、また初めて解放神学や第三世界の教会事情に触れる人々のために、本書が助力になれば幸いです。

最後に本書の出版に尽力して下さった同志社大学の深田未来生教授と日本基督教団出版局の皆さんに感謝申し上げます。

一九八九年二月一日

山下慶親

栗林輝夫